

里の宝再発見と地域づくり

～地元から学ぶ、暮らしと文化を伝承する、村ぐるみ活動のすすめ～



NPO法人里の自然文化共育研究所

Institute of Collaborative Education for Sustainable Rural Communities, NPO

出川 真也

Shinya Degawa

多面的・公益的機能の発揮

(水涵養、農産物の供給、ふるさとの原風景(癒し)、地球温暖化防止機能.etc)

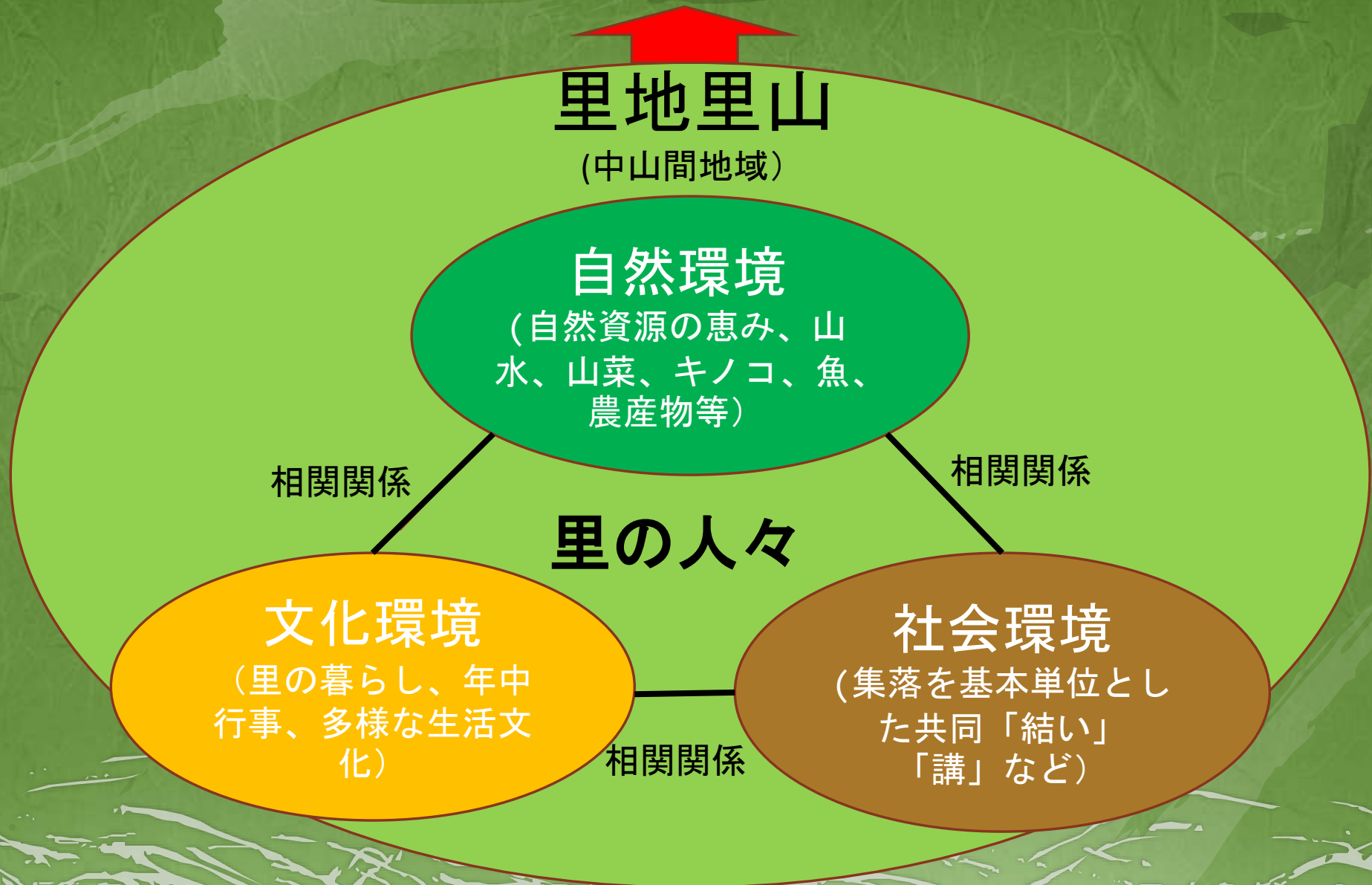


図 1: 里地里山構成の相関関係

山形県の典型的な山村：戸沢村角川地区



1. 東北山村の現状 - 課題から地域の価値・誇りの復権へ -

- (1)山村の過疎少子化と誇りの喪失「何もないムラ」という語り
 - ・ 日々可視化される課題の山積み状況
 - ・ 現状では生業として成り立たない山村独自の仕事や資源の数々
 - ・ 「よく何もないムラに来たなあ」という語り

- (2)多様な地域活動の存在と地域づくりの萌芽
 - ・ 地域共同組織を支える意識と多様な地域教育活動の存在
 - ・ 集落を基本単位とする互助協働の伝統的営みの存在

地元学とは

- (1)自分たちで自分たちのことを調べる、地元学ぶ「地元学」
 - ・ 自分たちで調べるということ-調べた人が一番詳しくなる-
 - ・ 単なる調査ではない住民のための調査-役立てるために調べるということ-
- (2)ヨソモンの目線の違いを生かして自分たちのことを再発見するプロセスの重視
 - ・ 住民にとっては日常的で当たり前。ヨソモンにとってはその当たり前がすごい。
 - ・ 外部者の目線を活用して外部者ではなく住民が自分たちのことを再発見する
- (3)従来型の（行政・研究者・コンサルタント等による）調査・研究・計画づくりとの相違
 - ・ 調査後の活動の展開を担う住民やかかわる当事者による調査ということ
- (4)当事者による地域計画づくり・組織と実行プログラム作り
 - ・ 自分たちで調べたことを元に企画
 - ・ 住民による現実的かつ自由な発想の計画作り
 - ・ 地域の実情に合わせた組織・プログラムの作りの遂行

地元学（地域の環境文化調査）

～まずは地域の「あるもの探し」からはじめよう～
子どもから大人まで地域住民とヨソモン参加で実施



地元学（地域の環境文化調査）

～聞いて、見て、やってみて、調べました～

子どもも大人もじいちゃん、ばあちゃんも楽しくなる



地元学で発見された水辺の生き物達



地元で再発見された郷土料理の数々



地元学（地域の環境文化調査）

皆で発表会 調べたものを地図にまとめて今後の活動を話し合う。
集落の将来の夢を語り合いました。



子供から大人、じいちゃんばあちゃんまでみんなで語り合いました。

地元学の成果物

- 地域マップ
- 地域資源カード
- 地域の歳時記

以上からこれからの地域づくりを考える。

互助の精神で 角川をつくる

人が元気
健康・長生き

集まる・楽しむ
太鼓。お茶

角川
サクラマス
ヤマメなど

ものづくり、
加工所

雪に生きる力

食べ物が
うまい

通学合宿
教育がいい

山菜が豊か

アトピーが
ない

手伝いあい

楽しむ 遊びを決めてから仕事する
ものづくりを楽しむ／飲んだり、食べたり、
おしゃべりしたりして楽しむ

生活博物館・角川

角川は毎日が生活文化祭

祭り・行事

お手伝いツアー
ワーキング・ホリデー

仕事

山、畑、田んぼ
など

参加・体験

遊び・楽しむ

川や山での
魚釣り、泳ぎ、
山歩き、山菜とり
など

見る・眺める
聞く

地域に根ざした手作り地域産品

角川里の自然環境学校の設立

最上郡戸沢村角川地区は

- 豊かな山と川に囲まれた日本の原風景を残す農山村
- 里の環境に根ざし貴重な自然や文化が息づく農山村

課題；地域の財産が受けつながられないまま廃れようとしている



角川里の自然環境学校の設立

- 地域住民が「里の先生」
地域文化（知恵や技術）を担う住民が活動の中心
- 地域の自然や文化を再発見
農山村の未来に向けて子供達に教え伝える取り組み
- 住民主体の新たな地域作りを行う地域運営学校

組織構成

角川里の自然環境学校は、
角川14集落の「里の先生」を中核に、6学校と4部局で構成。

- 山の学校
- 川の学校
- 食の教室
- 農の学校
- もの作り塾
- 民話・昔遊び塾
- 研究部（コミュニティ活動・環境保全/地域資源研究部）
- 交流部（里親委員会、ヨソモン交流会館）
- 探検部（南部里地探検隊）
- 応援部（自然学校サポーター ※主に高校生と若手社会人）

山の学校：散策会 一里山の文化を結び付けて学ぼうー

もの作り材料集め、炭焼き窯体験、ブナ林散策会



山の学校：ログハウス建設

子ども達の里山・農村学習の
拠点になっています。



里山散策会から得られた子ども達の
着想を元に、地元おじさんたちが計画

山の学校：炭窯作りの復活



地域の技術の再発見と活用、後継者の創出

ピザ焼き窯



川の学校



田んぼの学校



田んぼの学校ができたきっかけ



トウホクサンショウウオ
です。

きれいな水に住むといわれている。サンショウウオの群集落を発見！その他にも、
数多くの生き物たちが...

郷山田の生き物たち！



何ば、捕まえだ
や？



沼エビ捕まえ
た！



ビオトープ



生物生息地の再生

ドイツ語で生命を表す(バイオ)場所を表す(トポス)を組み合わせた造語

角川には13ヶ所作成済み!



農の学校：畑の学校（野菜作りと里山保全活動）



食の教室



地域伝統の食の技術が
新たな産品開発へつながる

食の教室



山の幸、川の幸、田畑の収穫物
を使った郷土料理などが行われ
ている。

もの作り塾

里の素材を生かしたもの作り塾を開催。



もの作り塾の作品

おじいちゃんおばあちゃんとの触れ合いの場



見て、こんなに
上手にでき
たよ！



角川民話塾

～角川弁で語られる地域の人々の心に残る言い伝えから学ぼう～



民話を手作りの紙芝居に

～昔話の始まり始まり～



↑子供たちの力作

そごさ おばうさんが やんべ 通りかかった。ワビ。
若者い。「この赤ちゃんはおんくやでつづったもつ。
（馬のフン）
だがら 火さくべつごんだ。んだけらとみんあしん
じねく、てなぐんだよ。んたかばら、どうにか
してけろ。」って言、たげども、おばうさんは
やういうごとは、よく見さためて言うもんだ。
すしは反省したまえ。おめーも ばうさんさ
らて 修行したまえ。」と言ったげど。

↑裏に書かれた文はすべて方言

3. 地元学後の展開 - 住民の草の根活動の組織的展開 -

- (1) 戸沢村角川地区の事例から - 里の自然環境学校の設立と活動の展開 -
 - ・ 地域運営学校としての組織 - 地元住民が里の先生として取り組む -
 - ・ 地元のありのままの営みを活動プログラムとして再生
 - ・ 地域環境保全や地域に寄り添った新機軸活動の導入・交流と学習の促進
- (2) 地元学は調査から実際の活動まで地域住民とヨソモンが織りなしながら作り上げる
 - ・ 取り組みに直接かかわる当事者が計画から実行、展開まで主体となるべきもの
 - ・ 地域内コミュニケーションの活性化と地域の潜在能力の発揮を促す

4. 地域活動の発展と継続性（１）

- コミュニティビジネスと集落を越えたネットワーク形成 -

- (1) 自律的な活動展開を目指したコミュニティビジネス構想
 - ・ 戸沢村角川地区の事例-山村地域から森里川海連携の広域協働活動の展開へ-
 - ・ 産品開発とツーリズムの活性化

模索

山村資源と山村の日常の暮らしを生かして、プログラムを
実践

コミュニティビジネス（ツーリズムや産品開発）への展開



里親委員会の取り組み

地元もヨソモンもみんなで里の自然や文化を伝え、暮らしを共有したい



ふるさとの原風景を元気付ける取り組みは地域もヨソモンも協働でかわりうるもの。
結果として交流人口が拡大しています。

※外部参入者のことを親しみを込めてヨソモンと地元では言います。

学習旅行の受入れ



学習旅行の受入れ



地元学後の展開方向の事例

農山漁村の暮らしを生かし、地域ニーズに対応した
プログラムを実行

- 自立的な活動運営のしくみと人材育成体制の形成
- 地域環境の保全と伝承
- 地域特性を生かしたコミュニティビジネスの推進
- エコツーリズム・グリーンツーリズムの展開

など

里地里山の地域と連携する活動作りのポイントとは？

まずはよく地域を調べること、地元の方の話によく耳を傾けること。ここから始まる。

□ (1) 住民主体の地域計画作り

(ヨソモンの目線の違いを活用しつつ自分たちで行う地元学調査とヴィジョン作り)

□ (2) 日常生活に立脚したプログラムとカリキュラム作り

□ (3) 里の何気ないありふれた素材を力づける

(保全と伝承、再創造、再活用、そしてコミュニティビジネスへ)

□ (4) 人材育成 (担い手育成)

そこにすんでいるおじさん、おばさん、じいちゃん、ばあちゃんが元気に暮らすことが一番の人材育成。そこに若者は引き寄せられてくる (かもしれない)。

問題や課題は地域にあるが解決策も地域にある。

しかし、それよりも地域にある価値を受け継ぎ革新していくというスタンスが大切。

4. 地域活動の発展と継続性（2）

- コミュニティビジネスと集落を越えたネットワーク形成 -

- (2) 広域的なネットワークの構築
 - ・ 活動を支える外部サポーターの充実
 - ・ 連携して事業展開を図るための近隣地域集落・市町村およびNPO団体等との相補的な関係の構築-継続性と有効性を保持する規模の確保-
- (3) ベースとなる地域づくりコンセプトの保持
 - ・ 地域の若者たち（担い手）が暮らし続けていけるための仕事を作り出そうという発想
 - ・ 伝統文化を継承しつつ地域の様々な基礎力（保全・生業・コミュニティ）を保持向上させようという基本的考え
- (4) NPO法人里の自然文化共育研究所の設立
 - ・ 広域的・普遍的な活動意義の発信とネットワーク形成-交流と学習の活性化-